

サービ斯拉ーニングをふりかえって

社会福祉学部社会福祉学科 2 年 春田 耀

活動先：NPO 法人 地域福祉サポートちた

ゼミ：野尻 紀恵

私は、地域福祉サポートちたで活動を行い、中間支援や地域活動がどのようなものなのかを学ぶことができたと思う。最初にこの活動の中から自分たちの学びたいことを各自で改めて考え、それから 6 日間の計画を考えた。私たちが一番に苦労したのはおそらくこの活動計画であった。中間支援というわかりにくいものとどのように関われるのか考えたのだが、どのような活動をすればいいのかわからず、最終的に楽ちた楽祭に日本福祉大学サービ斯拉ーニングとして参加することに決め、私たちはスタンプラリークイズというものを考え、これで参加することを決めた。スタンプラリーのスタンプは消しゴムを彫刻刀で削って自分たちで作し、クイズはクイズ用紙を置かせてもらう出店先にちなんだ問題を考えた。クイズ用紙とスタンプは同じところに置き自分が正解だと思うほうにスタンプを押してもらう方法（スタンプ用紙に A,B を書いておき、クイズ用紙の A,B はどちらかに正しい答えを書いておく）でスタンプラリークイズを行うことにした。出店先には事前の実行委員会会議で話をしておいてもらう許可をもらうことができ、スタンプラリーには景品と参加賞をつけることになり、景品と参加賞をいろいろ考えた。最初はうまい棒を参加賞にして、景品をくじ引き型のスーパーボールと消しゴム（フルーツなどの形をした）にしようとしていたのだが、うまい棒がほかのところと被るということになり、仕方なくきな粉飴にした。本当はもっと人が集まりやすそうな景品にしたかったのだが、景品にお金を使いすぎると参加費が増えてしまうので、5000 円以内の予算で景品と参加賞を決めて、人を 100 人集めるということを目指し、参加費 50 円＋参加賞でやることにしたのである。



当日は朝から店の準備をおこない、スタンプとクイズを置きにまわったのだが、考えていた以上に置くスペースがなくて、スタンプとクイズに気付いてもらえるか心配であった。さらに、当日になって店の看板を作っていないということに気付いて、あまっていた（クイズ用紙のために買った）画用紙に出店名を書き、無事に楽ちた楽祭を始めることができた。私たちは 4 人グループだったので 3 人で店を担当、残りの 1 人が交通整備を行うことにした。交通整備は交代制で行い、1 人 1 回やるようにした。祭りは、私が思っていた以上に人が来て、目標の 100 人には少し及ばなかったが 90 人以上がスタンプラリーに参加

してくれて、予想以上の結果になり終わってみると達成感があり、やってよかったと思えたのである。



私がこの活動の中から気付いたことは、中間支援というのは人とのつながりが最も重要なことなのではないかということである。この祭りもサポートしたNPOとして中間支援をする中で関わりがあったからこそ始まったもので、知多市を知ってもらいたいという考えから、地域福祉サポートした場所を貸して行った祭りである。関わりがないと場所を貸すなんてことはできない。そして、ただ祭りを行うのではなく地域の人との交流、知多市を知ってもらうというのが最終的な目標であり、同じ思いを持っている人との関わりがあればこそこの祭りであると気づき考えることができた。私もこの活動を行ったからこそサポートしたを知ることができ、新しいつながりもできたと改めて思い、中間支援というのは範囲が広くて難しいことだが、つながりからつながりを作っていくことが中間支援に限らず福祉にかかわることすべてに重要なことだと気づくことができたのである。



今回の活動の中で祭に来ている人は多かったのだが、参加者としての子どもや出演ステージのために来ている子どもの比率が多く、高齢者や若者が少ないように感じた。宣伝の広告も多く配ったのだが、場所の問題もあるのかもしれないが、地域交流という最終目標は1回限りでは余り達成できていないと感じた。だが、まだ始めたばかりの取り組みであり、これから長く続けることができれば、地域交流が広がり地域活動も行いやすくなるのではないかと考え、その意味では、地域活動の新たな基盤づくりを行えたのではないかと活動をふりかえって思った。私は、地域活動や社会活動というのはこのような交流などの取り組みを長期にわたり行うことが重要なことだと学ぶことができ、今後の福祉にも活かすことができるのではないかと考えた。私は地域などで行われる小さい祭りなど今まで特に意味はなく行っているものだと思っていた。しかし、今回のサービスラーニングの活動では、祭という形での地域交流の方法を知り、地域の活性化という意味での社会活動を知ることができた。